

52 奈良時代の『金光明最勝王経』の修法と香薬 その2

安部 郁子

公益財団法人 研医会

昨年は奈良時代に行われた『金光明最勝王経』大弁財天女品の修法が後の光明皇后の風呂伝説につながったのではないかという推論を発表したが、本年はこの問題について経典の側面から考えることを試みた。

【方法】『日本書紀』『続日本紀』『続高僧伝』『隋書』『大唐南海寄帰内法伝』などを使って、『金光明経』『金光明最勝王経』の歴史を整理し、経典が日本に与えた影響について考えた。

【結果と考察】『日本書紀』において最初に「金光明経」が登場するのは、天武天皇紀である。五年十一月「甲申、遣使於四方国、説金光明経・仁王経」とある。九年五月乙亥朔日「是日、始説金光明経于宮中及諸寺」と宮中でも講説が始まったことが記される。さらに朱鳥元年の七月「丙午、請一百僧誦金光明経於宮中」と宮中で大々的に経典の読誦がなされたことが述べられる。持統天皇の世になってからも、六年閏五月「乙未朔丁酉、大水。遣使循行郡国、稟貸災害不能自存者、令得漁採山林池沢。詔令京師及四畿内、講説金光明経」とある。水害があった後に人心を落ち着かせ、経典の功德を受けるために都と周辺の国で『金光明経』の講説がなされたのだ。八年夏四月「癸巳、以金光明経一百部送置諸国、必取每年正月上玄誦之、其布施以當国官物充之」と全国で読ませて護国の功德を期待する。そして十年十二月「己巳朔、勅旨、縁誦金光明経、毎年十二月晦日度淨行者一人」と、毎年十人を得度させることが勅された。

『続日本紀』においては、「金光明経」が7か所、「金光明最勝王経」が4か所言及される。記事には「太上天皇不豫」「水旱失時」「敬神尊佛」「国家平安」「聖法之盛」「年穀不豊 疫癘頻至」「悔過」「皇家累慶 国土厳淨 人民康樂」という単語があり、病や災害・不作に直面した時、この経典を読むことによって健康の回復や国家の安定を祈願し仏法を盛んにしようと考えていたことがわかる。

筆者は、この『金光明経』『金光明最勝王経』を日本、中国、韓国、インドネシア、タイで見ている。また、国内の展覧会ではホータン語、ウイグル語、そしてサンスクリット語のものが展示されてきた。この経典は6~9世紀アジアの各地で翻訳され、大流行した護国の経典なのである。その漢訳仏典の成立は北涼の曇無讖(Dharmakṣema)によるものであるが、北周の耶舎崛多(Jiānagupta)、梁の真諦、隋の宝貴三蔵らもこの経典を編している。ここで興味深いことは、梁の真諦(Paramārtha 西インド 優禅尼国の出身)について、『註金光明最勝王経』は真諦が南海を経て547年に健康に至り、梁の武帝の要請で7巻本を作ったという伝を載せていることである。つまり、私たちはインドから中国・梁に至る地図を思い描くとき、船での往来についても考えるべきで、すでに仏教の栄えていた東南アジアについても視野に入れることになる。さらに唐の則天武後の時代、長安三年に義浄が自ら持ち帰った梵本を訳出した。今回、参考にした西大寺本はこの義浄の十卷三十一品を写した経巻である。『大唐南海寄帰内法伝』で有名な義浄も、海路でインドに巡礼し、仏教大国シュリーヴィジャヤ王国を訪れている。一方で義浄は北インドの沙門である法宝、法蔵、徳感勝荘らとも経典の研究をしており、この経典には西域伝来の要素も、南海伝来の要素も入り込んでいることに注意すべきだろう。